

3月号

吾孺二中 ニュースレター

A to Z

墨田区立吾孺第二中学校

令和8年3月9日

無知が差別を生む

校長 佐藤 順一

今月4日にハンセン病を題材とした人権尊重授業を1年生と5組で実施しました。かつて日本では「恐ろしい伝染病」という誤解が広まり、多くの患者が強制的に隔離され、家族との生活を奪われるという深刻な人権侵害が長い間続きました。しかし、実際にはハンセン病は極めて感染力の弱い病気で、現在では適切な治療によって完治する病気です。にもかかわらず偏見と差別は根強く、人々の生活や尊厳を長く傷つけてきました。

なぜ、このような差別が生まれ、長く続いてしまったのでしょうか。その背景には、科学的知識の不足や不正確な情報、そして「らしい」「きっとそうだ」という思い込みがありました。歴史を振り返ると、誤った理解が政策を形づくり、社会全体の偏見を強めてきたことがわかります。まさに「無知が差別を生む」という事実が、ハンセン病問題には深く刻まれています。

授業の中で子どもたちに伝えたことは、「私たちは知らないことを恥じる必要はない。しかし、知らないままに他者を傷つけることは許されない」ということです。お互いを理解し、学び続ける姿勢があれば、差別や偏見は必ず減らすことができます。反対に、中途半端な情報や噂だけで相手を判断してしまうと、気づかぬうちに誰かを追い詰めることにつながります。

また、ハンセン病の回復者の方々の言葉も紹介しました。「何が正しいか、自分で考えてほしい」「未来を皆さんに託したい」。この言葉には、自ら人権侵害を経験した人たちだからこそ語り得る重みがあります。私たち大人も、この言葉をしっかりと受け止めなければなりません。

現代社会では、インターネットなどを通じて膨大な情報が一瞬で手に入ります。しかし、その情報が正しいとは限りません。だからこそ、「知ろうとする姿勢」と「確かな情報をもとに判断する力」がますます重要になっています。本校ではこれからも、人権教育を知識の習得だけに止めず、「自分の行動は誰かを傷つけていないだろうか」という内省ができる子どもを育てていきたいと考えています。

子どもたちが将来、互いを尊重し、違いを認め合える社会をつくっていくために、学校・家庭・地域が一体となって学び続けることが必要です。今回の人権学習が、子どもたち自身だけでなく、私たち大人にとっても「学び続けることの大切さ」を改めて考えるきっかけとなれば幸いです。

[この話に関する4つの力：つながる力、見つめる力、乗り越える力、見通す力]

令和7年度展覧会(校内作品展)

